HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	物語理解に含まれる一般的言語的コミュニケーションの原型について（X）
著者	小島，康次; KOJIMA，Yasuji
引用	北海学園大学学園論集(159)：165-173
発行日	2014-03-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

物語理解に含まれる一般的言語的コミュニケーションの原型について（X）

小　島　康　次

10．ラカンの精神分析からみた言語とコミュニケーション

10．1　精神分析の記号論

10．1．1　フロイトの無意識からラカンの言葉へ

ラカン（Lacan: 1901-1981）が，『フロイトに還れ』というスローガンをしばしば唱えたことは周知の事実である。ラカンの理論は難解であるというイメージが一般的である。しかし，筆者の見たところラカンは二人の巨匠ともいうべき先達の忠実な解釈者だったと思われるのである。ラカンにとっての先達の一人はフロイトその人であることは言うまでもないであろう。先に挙げた「フロイトに還れ」という有名なスローガンは決してレトリックではなく文字通りに解すべきである。もう一人の先達は，実はフロイト以上にその学説に忠実に従っているソシュール（Saussure, F. de.）である。フロイトの精神分析をソシュールの記号学の道具立てを使って細部にまでこだわりをもって再現したのがラカンの理論だと言うのが本論の大まかな仮説である。

しかし，このことはラカンの理論がオリジナリティに欠けることを意味するものでは全くない。精神分析を記号論で再構成することがどれほど困難なことであったかは，ラカンの理論を理解すべく取り組んだ者であればすぐに気づくはずである。二つの理論の徹底的な接合の試みであるラカンの理論は，ラカン以外の誰も実現できなかった独創的なものになっていることは明白であろう。そうして見るとラカンの文章が難解であるのは，ラカンが敢えて自分流に分かり易い文章を創作したりせず，先達の理説に忠実に従った議論をしたためであるとも考えられる。フロイトの理論を理解するのもソシュールの学説を理解するのも，それ自体大変な困難を伴うものである。したがって，それらを接合したラカンの理論の難度はさらに高まることは必定であろう。

ラカンによれば，神経症者が治癒するのは，それまで言葉にできなかったことを語ることができるようになることによってである。フロイトの意識化に対して，ラカンはこの言語化こそが決定的に重要な治療過程であるとした。精神分析最初期の症例アンナ，O.は，ブロイアーを介して，フロイトに多くのヒントを与えただけでなく，この治療法を「煙突掃除」とか，「おしゃべり療法」と自ら名づけ，ラカンにも影響を及ぼしたことになる。神経症の原因は，強い嫌悪を引き起こす体験そのものではなく，その嫌悪を言葉にできなかったということであるという病因論が導かれ

る。症状とは，できなかった言語化の代わりに現れるものであるから，語ることによって初めてそれは消失するものだとされる。

この言語化の中心をなすのがラカンによってシニフィアンと呼ばれるものである。元々ソシュールの言語学で用いられた用語であるが，ラカンはそれを精神分析の概念として再生させた。ソシュールによって与えられた記号の原理はラカンの精神分析学という新たな創発的理論によって記号の原理そのものの成立過程を解明するところまできたのである。本項は，フロイトを経由しソシュールを経由した目でラカンを読み解くことによって，ラカンの理論が目指した記号の成立に関する議論をできるだけ明快に論じる試みである。

10．1．2　自我の成立過程を問い直す

フロイトは，「エスのあったところに，自我をあらしめよ（Wo Es war, soll Ich verden.）」と述べた。これは一般に，1920年以降，彼が第二局所論を導入し，エス（欲動の源泉）と超自我（倫理あるいは道徳の源泉）を現実的に調整する審級として自我（エゴ）の役割を表現したものであるとされてきた。自我は，無意識的な欲動の住処であるエスを征服しなければならない，と解される。したがって，フロイトにあっては，神経症患者は自我を強化することによって健康な人格を回復できるとされるのである。しかし，ラカンは冒頭の表現を，「私(Ich)は私の真の(本来あった）場所にあえて接近しなければならない」と捉え直す。私の真の場所とは何か，どのようにしてヒトは本来の私になり得るのかを厳密に解明しようとした。もっと精確に言うならば，フロイト派がその後とった「自我」を重視する立場から，エス（S）すなわちシェーマLにおける「主体」と，その創発の謎に挑戦した。それがシェーマLという図式で表された「鏡像段階論」だったと考えられる。

フロイトも主体の形成過程に言及していないわけではないが，それはもっぱら自我の発生に関するものでしかなかった。フロイトによれば自我は，エスの一部が外界からの禁止のような抑圧に対処するために変容したものだとされる。だから自我は完全にエス（この場合のエスとは，第二局所論におけるIdoのことである）から分離しているのではなく，境界上では融合していると見られる。その主な仕事は，抑圧によって生じた不快感を現実原則によって調整し，心的構造内に不協和音が生じないようにすることである。しかしながら，自我（また，超自我）がどのようにエスから派生するのかということに関するメカニズムは十分に説明されているとは言い難い。

人間の精神構造に自我のような装置が設(しつら)えられることになったのは，動物一般において機能していた本能の働きが何らかの理由で阻害されるようになったことに原因があると考えられる。個々の衝動は，本能プログラムという全体として生存という目的のために整序された状態から，そのままでは互いに矛盾し，葛藤する不適応な状態に分断され，バラバラになってしまったと考える。このような種としての不安定さを解消する術は原理的にはなかったであろう。恐らく，様々な偶然的な出来事の重なりによって，ヒトは外的な対象に本能に代わる役割を見出し，それを内

化することに成功した唯一の種だったのであろう（小島，1992）。

ここで問題になるのは，それまで存在しなかった自我という装置がどのようにして創発したのか，ということ，また，順序としては逆になるが，外的な対象を内化するとはどのようなことか，それはどのようなメカニズムによって可能か，ということである。これは，系統発生的なレベルあるいは人類史における一つの出来事としての意味と，それを個体発生のレベルにおける出来事として個々人が獲得する上での意味という二重の課題を投げかけるものである。

フロイトは『トーテムとタブー』において人類史的なレベルの意味を，また，オイディプス・コンプレックスの発見によって個人の発達上の意味を明らかにした。しかし，そのフロイトの理論は，20 世紀という新たな思想の世紀における思想的吟味を受けなければならなかった。第一に，創発のメカニズムとしてみるとフロイトの自我，超自我の発生に関する説明は素朴過ぎる。それは，19 世紀的な実在論的合理主義思潮下では十分了解可能だったものではあるが，20 世紀的な問題状況下ではさらに精密な論議を必要とする。第二に，上記の課題とも係わるが，自己言及性のパラドクスを理論に取り込んでいない点に問題がある。特に，自我のような装置の在り様を論じる際に，自己言及性のパラドクスへの論及は不可避であろう。第三に，言語そのものに根差す問題が論じられていない。これはソシュールに代表される言語学の飛躍的進展，さらに哲学における言語論的転回をまって初めて課題として俎上に載せられたことである。

10．1．2　ラカンの想像的同一化と鏡像段階

ラカンの同一化の概念は，フロイトを超えて究極的な問題提起にかかわるものである。それは，既に存在する二つの心域間の相互関係を理解することにとどまらず，それらの一方が他方を生み出すような関係，いわば創発のメカニズムに表現を与えることだったからである。フロイトの場合，同一化の観念は，すでに存在する二項間に変容が生じることとされ，心理学的な三次元空間で行われた伝統的な図式を無意識の空間に置き換えただけのものだったのに対して，ラカンは，そこに新たな心域の創造のメカニズムを見出したところに独創性がある。すなわち，自我が対象に同一化する，というフロイトの図式を逆転させて，対象こそが自我の同一化の原因であると主張したのである。自我とは内部から外部への運動や投射によって形成されるものではなく，逆に，それは初めから外部受容的な何物かであるとされる。言い換えれば，フロイトは外部実在世界を前提とした上で，それを内化するメカニズムとして自我の投射のような形成過程を考えたのに対して，ラカンはそうした前提自体をも疑問に付し，括弧に入れてしまうところから出発する。

ラカンにとって同一化は，新しい心域の生成を意味する。人間が初めて自分が人間であるという原初的体験をもつのは，鏡の中に映った自分の姿を見て，その像をわがものとして引き受ける時であるとラカンは言う。しかし，それは自分自身だけでできるのではなく，自分を抱いている母（の役割をする他者）の眼差しをたどって振り向くことによって始めて達成される。母の表情の中に，自分を認めてくれる眼差しを発見することで子どもは，ようやくその像が自分自身であ

ると認識できる。

この，いわば鏡像への同一化の過程は，純粋な視覚的現象に還元することはできない。だから，恐らく鏡像を自己と認知できるかどうかという実験研究（類人猿を用いたルージュ・テスト等）との整合性は一定の意味をもつとはいえ，それがこの問題の決定的な要素ではありえない(Julien, 1990/2002)。ここでもっとも重要なことは，子どもがその像をわがものとして内在化するためには，母（ラカンの図式「シェーマＬ」では，大文字の他者＝Ａとして表される）において一つの場所を確保しなければならないという差し迫った要請である。しかし，その場所は十全たる自我の存在を保証する最終的な場ではない。それは実際には未だ完成されていない全体像を先取りした視覚像としてのみ設定された空間的同一化に過ぎなかったのである。そうしてみると，鏡像段階とは，先取りされていながらも，それが不十分であるために内的な力が加速されて，身体における未熟さを一気に統合する視覚像において演出された劇的変化だと言えよう（Lacan, 1966/1972)。

想像的同一化の過程で，ラカンの言う自我はどのように形成されるのだろうか。こうした議論の前提として次のことを理解しておく必要がある。外部世界が実在するモノによって構成されているとする19世紀的な認識の前提をまず覆さなければならない。対象とは，モノそのものではなく，そのモノの心像であるということを明確にしておく必要がある。外部世界と自我とは共に心像によって構成された同じ地平にあるモノであり，両者は境目のない一つの想像的領域なのだということである。つまり，自我について言うならば外部と内部の区別は存在しないことになる。それどころか，自我は，意識的な内部感情の中にあるのではなく，むしろ，外部にある像（自分と似た他者像，あるいは，己自身の姿を認めることができる像）の中にこそ現れるのである。

ナシオ（1988/1990）は，この他者像の中に現れながら，さらにそこから遠ざかるもの，それこそが真に自我を虜にするものの正体であると言う。他者像の中の知覚し得ない部分とは，その陰の部分であり，性的な部分に他ならない。自我は，その心像の中の窪んだ部分，すなわち穴の部分と現実的に同一化すると考えられる。自我を生み出す想像的同一化とは，この空白の部分との融合を意味する。

鏡に映った自分の全身像を初めてみた時，子どもは強烈な衝撃を受け，その虜になる。自我はこの時，人間的形象を示す中身のない空虚な枠として出現し，子どもの心像の輪郭としてしか存在し得ない。この最初の輪郭線が後に無意識の主体を表象する象徴的心域へと変化するものと考えられる。

10．1．3　想像的同一化から象徴的同一化へ

フロイトは同一化を三通りの形式で記述している。その第一の形式がオイディプス成立の条件であり，最初の同一化が超自我だとされる。これは全体的同一化と呼ぶべきもので，神話的な父に対する攻撃的な取り入れである。『トーテムとタブー』でフロイトが論じたように，原始時代，

群れのボス（父）を若者達が語らって打ち殺し，そのボスが所有していた妻達（母）を争って奪い合った時の記憶痕跡である。いわば父殺しの寓話を世代間で伝達することにより，オイディプス・コンプレックスの土台が形成されると考えられた。

ラカンが注目するのはフロイトが「一なる印（しる）し」と呼んだ，部分的な性格をもつ同一化の方であった。フロイトはこれを，神経症症状を説明するために導入し，敵意や性欲の対象である人物の表象によって主体が置換されることを指すものとして用いた。対象が失われるとき，そこに向けられていたリビドーの備給は同一化と取り替えられる。その場合の同一化は部分的で，限定されたものであり，どの対象からも一つの特徴しか取り入れられないものであることから，この「一なる印し」という名前がつけられた。

ここでいう「対象」とは先に述べたように，実在する人物やその特徴の一部を指すものではなく，厳密なラカンの用語法に従えば，無意識的な表象（イメージ）を意味するものと考えられる。この部分的同一化には，ラカンの理論における象徴的同一化，想像的同一化，幻想的同一化という三つのカテゴリーの区分に対応する三つの種類の同一化が含まれる

ここでは，想像的同一化からいかにして象徴的同一化が創発するかについて考えてみよう。象徴的同一化とは，まさに無意識の主体が立ち上がる過程を指し，次項で述べるように一つの際立ったシニフィアンが生じることと軌を一にする。ラカンはソシュールの記号学の原理にしたがって厳密な形式論理的分析を推し進めた結果，シニフィアンを統合している輪郭線の存在に行き着いたのである。

輪郭線とは，その人の生の外部にありながら，つねにその人らしさを表す不在の特徴のことである。この謎めいた〝輪郭線〟の正体は言語である。言語を学ぶことによってわれわれは記号と化す。この人間という一種特有の記号のあり方に対する呼び名が「シニフィアン」である（Lacan, 1966/1972）。ここで注意すべきはシニフィアンとは何かの対象を示す意味の記号ではないということだ。それは失われ，欠けてしまった何かを示す記号ではなく，消し去るという行為そのものの代理物と考えられる。いわば大地に穿った穴（の痕跡）そのものではなく，そこに生じた空無を間接的に示す掘り出した土塊のようなものによって辛うじてその存在を知ることができる受け身的な記号であり，行為そのものでもなく，その痕跡を先送りする反復的な運動を表すものでしかない。

10．1．4　シニフィアンと無の刻印―自己は他者である

記号そのものの成立過程の解明に向かうラカンは，主体が想像界から象徴界へと接合されてゆく瞬間の重要性と永続性について繰り返し論及する。なぜなら主体の分割が起こるのも，欲望の対象がシニフィアンにすり替えられるのもこの瞬間においてであり，この最初の結合の場面にこそ象徴内に生きる人間としての出発点が見出されるからである。したがってこの想像界と象徴界の接続がトポロジー的にどのように表現されうるかがラカンにとっての重要な課題とされ，それ

は後にボロメオの輪という図式によって漸く明示化されるに至ったのである。

ここでもう一度シニフィアンとは何かという問いにもどってみよう。ラカンの理論におけるもっとも重要なキーワードであるシニフィアンという概念に対して，ラカン自身は意外にもそれほど明確な定義を与えていない（伊藤，1995）なぜならシニフィアンは既にソシュールの言語学において厳密に定義された概念であって，それに何ものをも付け加える必要を感じなかったからだと考えられる。ラカンの理論の中でもシニフィアンはソシュール言語学同様，恣意性と差異の体系の2つを特徴としてもつもっとも基本的な概念である。したがってシニフィアンは自らのうちに自らを支持できるようなものを持たず，他のシニフィアンとの差異によって初めてその意味を知ることができるような存在である。言い換えれば，シニフィアンとはそれ自体では意味をもたない，欠けた，空虚な存在だといえよう。しかし，それは別のシニフィアンに対してその無を差し出すことができる開かれた空無である点が重要である。

ソシュールの記号学において往々にして誤解が生じやすいシニフィアンとシニフィエの対応関係はラカンの場合においても反復される。シニフィアンの意味は記号内容であるシニフィエではない。それは別のシニフィアンとの関係のもとにしかとらえられない何ものかである。主体自身もシニフィアンによってしか表されることがない以上，主体もシニフィアンの作用によって現れてくるものに他ならないことになる。同様に無意識も言語を通してのみ接近可能なものであり，パロールとの結合がなければ感知されることができないものである。だから，無意識もまた，パロールの作用だと言えよう。

無意識とはシニフィアンの連鎖を介して初めて現れてくるものであり，それ以前には存在しないものである。人間は言語の世界に参入することによって，同時に無意識を抱えることになったというのはこの意味においてである。無意識は主体に対するパロールの作用であり，パロールの発展のなかで主体が決定される次元でもある。他方，パロールが他者に理解されるためにはそこにランガージュがなければならず，その意味で無意識もまた，言語と同様，独自の文法と論理をもっていなければならない。

言語はわれわれの住む世界の意味を構成するものだと考えられているが，実際は，言語と対象とはこれまで述べてきたように，それらの間に必然的な関係があるわけではない。そして言語はわれわれが生まれる前からそこに厳然と存在し，われわれはそれを受け身的に学ぶ他対処の方法がない。自己の外にある言語という他なるもの(大文字の他者)を無条件に受け入れることによって主体は記号となり，自らの消失をシニフィアンによって代理させることができるようになる。

シニフィアンは次なるシニフィアンに回送されて連鎖を形成し主体を生み出していくけれども，それが主体そのものを表すということは決してなく，主体と同じ空無を刻み込まれ先送りされた他者によってのみその役割が果たされることになる。ラカンの「自己は他者である」という命題は，「人間は記号である」という，より根源的な命題から自然に導かれたものと思われる。

10．2　フロイトの『夢判断』からラカンの〈現実界〉へ

10．2．1　反復強迫と死の欲動（タナトス）

フロイトは夢について，それが欲望の充足を目的としたものであると述べている（Freud, 1899）。しかし，1920年にフロイト理論の大転換となる論文『快感原則の彼岸』において，戦争神経症患者によって頻繁に報告された強烈な恐怖の体験を再現するような悪夢の事例は，そうした夢の解釈を根本から覆すものだった。フロイトはこれを反復強迫と名付けて後期の理論における重要な概念として位置づけた。それに先立つ1914年出版の『想起，反復，徹底操作』という論文において，すでに反復という概念の治療上の意味づけはなされていたが，分析理論全体を再構成するところまで進めたのが先に上げた1920年の論文だった。

それまでのフロイト理論は生物学や心理学（ダーウィニズムや行動主義）の前提である快―不快の原則と共通の思想的土台の上に構築されたものだった。その意味で初期の精神分析学は生理学を含む自然科学との親和性の高い理論だったと言えよう。ところが，ここで問題となっている反復という現象は，そうした普遍的な原理と相容れないものであることが明白になった。主体が抑圧その他の防衛機制によって対処できない外傷的体験に遭遇した場合，それは主体から苦痛を取り去るように象徴化されることを求める。言い換えれば耐え難い外傷体験（戦友が目の前で爆死した光景等）を夢の中で象徴的に追体験することにより，通常の制御可能な精神的活動へと組み込むことが可能になる（と考える）。そのことによって外傷体験がもたらす苦痛を緩和しようというメカニズムが反復だとされる。これは通常の苦痛な体験（失敗経験のような）であれば効果的であると考えられる。

しかし，外傷体験は通常のそれを遥かに超える深刻なものであり，フロイトが反復強迫と名付けたように，実際には効果のない場合が多く，そのためにこの作業は際限なく繰り返されるのである。快感とは正反対の苦痛を求めるかのような心理学的審級の存在がフロイトの前に立ちはだかった。フロイトの強靱な学問的探究心がなければ，このきわめて重大な問題状況も凡庸な補助仮説によって脇に追いやられていたかもしれない。フロイトの天才はここで記号論的解決の道を編み出したことである。それはどのようなものだったのか。

結果として自ら苦痛を求めるかのような外傷体験の反復は，生きるための欲望に沿う快感の審級とは全く異質のものである。このことの意味を明瞭にするためにフロイトが到達した概念は，それまでの精神分析の理論からすれば突拍子のないものだった。「死の欲動」，多くの弟子達にとって理解し難い概念であったことは想像に難くない。これはフロイトの精神分析におけるコペルニクス的転換と呼んでも大袈裟ではない，真に劇的な理論的大転換だった。フロイトの精神分析は自然科学の延長上の理論という位置を大きく超え出て，一つの思想へと変貌を遂げる瞬間だった。

外傷体験とは一体何だろうか。その最初のものは出産時に遡るとフロイトは言う。母の胎内で安寧に育つ胎児の状態から，いきなり，外界に産み落とされる赤子は大変なショックを経験する。そこからは呼吸も栄養の摂取も，すべて自力で行わなければならない。胎内にいた時とは全く異

なる世界へ突然投げ出されるのである。これが外傷体験の原点であり，「出産時外傷」と呼ばれるものである。これはヒトがすべからく体験しなければならない外傷であり，回避することも対処することも不可能な原初的体験である。同様にヒトはその生の終末においても無力な対処のしようのない状況に直面しなければならない。言うまでもなく死である。生きるということは，生を全うするための活動であると同時に，それと正反対の死へ向かう活動でもある。ヒトの生は死と対になって初めてその全体像を顕すと言えるだろう。言い換えれば，反復とは快感原則の反対の側で生の意味を担保する死の欲動に根差す活動だと言えよう。

初期の精神分析は科学的心理学の観点から，異常な心理状態を正常へ治癒することを目的とした治療論が中心だった。しかし，快感原則の彼岸をへた精神分析はそうした目的を一旦棚上げして，人間の本質を理解する思想へと大きく変貌を遂げた。したがって，初期の理論には設定されることのなかった欲動という概念が導入され，目的をもった欲望とは明瞭な区別がなされ，それは目的をもたないものとして定式化された。初期の頃からフロイトの忠実な弟子として付き従ってきた高弟達にとっては理解を超える変容に困惑しながら，それまでの治療論を踏襲するしか術がなかった。

10．2．2　「死んだ父」の夢―フロイトとラカン

フロイトが『夢判断』の中で記述した夢の例に，「死んだことに気づかない父の夢」というのがある。後述するようにラカンがしばしば取り上げて，フロイトとは異なる解釈を与えた例として知られるものである。

これは病気だった父親を長期間にわたって看病した後，亡くした男の夢の話である。その男が繰り返し見た夢の中で，死んだはずの父が生き返ってきて，生きていた時と同じように会話をするというもので，その息子は内心，父親は自分が死んだことを知らないのだと感じて申し訳ないような罪悪感を抱くというもの。この夢は初期のフロイトのエディプス・コンプレックスの観点から解釈すれば，抑圧したはずの母親に対する潜在的な欲望から父の死を願う気持ちが意識に上るのを妨げるメカニズムが，夢において緩んだ検閲の隙をついて，自分が父の死を望んでいたという夢のストーリーを構成したのだと考えられる。父がそうした息子の隠れた願望に気づくことに対する恐れが，父が自分の死に気づいていないというストーリーを生みだしたのだという解釈である。

ラカンは，このフロイトの解釈に対してより根源的な解釈を対置する。フロイトがエディプス的な無意識の欲望だとした夢の中で，実は欲動が働いていたのではないかと考える。その欲動とは言うまでもなく死の欲動である。敢えて欲望という用語を使うならば，エディプス的欲望ではなく，死への不安から自らを遠ざける欲望が働いていたと考えられる。死んでいることに気づかなかったのは父であるが，息子もまた夢の中では父の死に気づいていなかった。息子であるこの男は父の死を通じて自らも死を迎える存在であることに気づかされることを避けていたのではな

いか。つまり，死を忘却した父の夢は，父の死に直面した息子自身の主体が，自己を死から遠ざけるために紡ぎ出した夢だったのである。

これは何を意味しているのだろうか。そもそも主体の死とは何か。もう一度，主体とはどのようなものだったかを思い出してみよう。言語はわれわれが生まれる前からそこに厳然と存在し，われわれはそれを受け身的に学ぶ他対処の方法がないものだった。自己の外にある言語という他なるもの（大文字の他者）を無条件に受け入れることによって主体は記号となり，自らの消失をシニフィアンによって代理させることができるようになる，というのがラカンの記号論的解釈だった。シニフィアンは次なるシニフィアンに回送されて連鎖を形成し主体を生み出していくけれども，それが主体そのものを表すということは決してなく，主体と同じ空無を刻み込まれ先送りされた他者によってのみその役割が果たされる。つまり，ラカンによれば「自己は他者である」ということになる。

主体は自我という反復する外部の印へ同一化することでその外部の仮の姿を自己と混同して辛うじて存在するものであることは既に述べたとおりである。主体は原理上，それ自身の真の原因とはなれず，シニフィアンの効果としての位置に甘んじなければならない。

福原（1998）はこの事例を次のように論じる。エディプス的願望とは父の死を願うことだけに止まらず，息子が父との同一化をとおして，自らの内部に呼び込むことになる死への不安を喚起することにもなる。主体はエディプス的な欲望が芽生えたその時から，父と同じく死をその内部に取り込むことを宿命づけられている。主体は死んだことを知らない父同様，そのことに無知であろうとする存在へと自らを仕上げていくと考えられる。